



# 終わってしまった 夏はとりもどせない

**後悔と自己嫌悪で終わる夏。**そして、その気持ちをひきずったまま九月のスタート。悲しいね。つらいね。もつとも、きみだけではない。そんな受験生が、周りにもいっぱいいる。さて、どうしようか。

勿論、きみは気をとり直して再びがんばり始めるだろう。それは確実だ。しかし、きみはきつと分かってはいないはずだが、**「また後悔と自己嫌悪を味わうことも確実だ。」**しかし今度は、徹底的にきみを痛めつける。受験までの残り時間が少なくなっているからだ。

一体、人生に於いてムダなことはない。回り道をして、失敗しても、きみが年齢に応じた成長をしていけば、決してムダにはならない。後悔や自己嫌悪を何回か味わっても、そこから現実を知り、自分の弱さを知り、次の試みのときの工夫をするというように進んでいければよいのだから。ただ、ある事柄に於いて、回り道や失敗をしないですむとしたら、それはその方がよい。何故なら、人生には、山程難問が待ちつけていて、好むと好まざるに関わらず回り道も失敗も重ねてしまふのだから、一つでも減らせば、その方がよいのだ。

さて、今、後悔や自己嫌悪を味わい、またこの冬にも同じ気持ちをもっと強く味わうはずのきみ。再度いつ、どうするんだ。ここが正念場

である。再び決意して動き出す前に、よくよく考えることだ。そうすることが、また次に行き詰まったときに立ち上がる力を生んでくれるからだ。

といつことで原則の確認  
とにかく続けること。何故、後悔するかという、勉強が中断するからだ。中断することなく続けられれば、多少やり方に間違いがあっても伸びていく。(また、やる過程で、そのやり方もまた学習能力も改善向上していくものなのだ) 続ける人はとにかくすごい。いつの間にか、いろんなものを仕上げていく。

**「点数が伸びるまでには時間がかかる。」**ある科目を適切なやり方で勉強すれば、力は着実についていく。ただ、模試は、その科目の総合的な力をみるもので、ここがでてるかは分らない。解答を出すにあたって、複数の道具を使うことも多い。だから、力については、うる覚えの部分が多ければ、点数は、勉強を始める前とほとんど変わらなかつたりする。それでもあきらめずにやること。伸びるまでのある程度の時間、これに耐えることが必要だ。

**「学習のリズムが必要。」**一日だけがんばっても次の日にやらなかつたらアウト！その日に思いついた科目をやっていると、必ず長期間やらないう科目が出てきてアウト！英数は毎日やるタイミングで、残りの科目は一日おきとか、とにかくリズムを作ってそれを守る。ただし、国立大志望の人は、理系の場合、「国社をいつからやるのか」、文系の場合、「理科をいつやるか」がポイントになる。他の主要科目が遅れているなら、十一月まで開始を遅らせることも必要。

過去問をやる時間を確保する。高校大学受験

に限らず、司法試験から医者国家試験、更には運転免許の試験まで、過去問の研究は大切だ。何がどう出ているか。そして、どう解けばいいか。自分が苦手な問題分野は何か。そうしたことは、全て過去問があればこそ分かることだ。十月から、遅くとも十一月から、一週に一年分ずつ英数国は過去問を解いていく作業を怠らさずに入りたい。

**「受験生は(勿論、大学受験生も)、秋から冬にかけて大きく伸びる。」**夏までの勉強は、いわば知識を入れる勉強。秋からは、それをアウトプットする勉強。夏までに入れた知識を忘れることなく反復しつつ、問題を解く作業を重ねていけば、模試などの点が飛躍的に上がる。

**「志望校で安易な妥協はしない。」**高校受験でもある程度いえることだが、大学受験では、いくつの大学でも受験可能である。現役生で七、八校というのも珍しくない。だから、やれる所までやってそれから最終決定するぐらいの気持ちでよい。ただし、勉強もせず、安易なことを考えて高望みするのは、これを「バカ」という。



**「同じことをやっているのに、伸びる人と伸びない人がいるがその違いは明確に存在しているのだ。」**余り考えずにただくり返すだけの機械的勉強でもやらないよりはずっとましなのだが考えてやっている人とは大きな差がついてしまう。残念ながら、そのことを指摘してくれる教師は少ない。また生徒も受験勉強の経験をその程度もできるわけではないから、他の人と自分の違いを「出来る出来ない」以上には分析することはかなわない。「出来る人」に尋ねても使

っている参考書や勉強量を教えてもらえる程度だろう。だから、私がいつてやるのだが、伸びる人は、とにかく考える。調べる。答えがなくてもあきらめない。質問する。細かいことにも、望ましい成果につながるようなこだわりを持たず。例えば、不明の単語があつたら、必ず調べたり、一方でその意味を前後からあてようとする。一日だけでは、差は生まれませんが、一ヶ月もたつと、考える人と機械的作業の人とは大きな差がつくこととなる。自分はどつなか、よくよく考えてみるんだ。

**「負の連鎖から脱却する。」**塾には来る。でも集中しない。課題はやらぬ。模試は受けるだけ。こつこつを負の連鎖という。やってはいけないうちの小さな失敗を毎日毎日重ねていく。心のどこかではまずいと思いつつ、止まらない。これは自分をだめにする。一時間一時間、歯をくいしばって小さな成功を積み重ねていく人との差は歴然。やるときは歯をくいしばれ。

以上、思いつくことを書いてみた。人が一生懸命やって無駄なことはない。自分の願望をしっかりとみつめ、精一杯の力を出してもらいたい。因みに私たちは、先に生まれ生きた者として、また自らも受験を経験した者として、きみ達の味方であり、同志である。きみ達が前に進みたいという気持ちをもつ限り、全力で応援をする。もし、行き詰まるようなことがあればいつでも相談してほしい。(小林健)

## 意識改革

意識とは、われわれの知識・感情・意志のあ

らゆる働きを含み、それらの根底にあるもの。つまりは、今していることが自分で分かっている状態のことをいう。

部活動で大会やコンクールに向けて、また受験生は志望校に合格することなど、目標を掲げることがはたやすい。

しかし、その目標に向けて自分は何をすればよいのか、それをどのように続けていけばよいのかを見つけることは意外と難しい。

ここでは、それらを見つけ、意識改革のきっかけとなった一例として、中学三年生の夏合宿をあげてみることにする。

創学舎では、中学三年生を対象に三泊四日の夏合宿を行っている。

今回、各科目の講師から自学自習の方法を伝え、それを実践してもらい、一人ずつに対して各講師がその進行状況をチェックしていった。

自学自習の方法とは、教科によって違いがあるのだが、細かい部分にこだわり問題を解き、解説をしつかりと読んで理解することである。たとえば数学では、途中計算をしつかり書いて一つ一つ丁寧に解くことが、学力アップにつながる。なぜなら、途中計算を書いていなければ、自分で解くプロセスが身に付かず、次に似たような問題を解いても同じ所で間違えてしまうからである。

さらに、時間をかけることで、難しい問題が出てきても腰を据えて取り組んでみようという気持ちになる。その時、どうしても解けなくてあきらめかけたとしても、一緒にがんばっている友人に励まされたり、担当講師から答えを導



き出すヒントをもらったりして乗り越えることができる。ずっと下を向いて問題とにらめっこしていても、顔を上げて周りを見渡すと、同じように一生懸命問題を解いている友人やそれを見守ってくれる講師の存在の大きさに気付けるだろう。

このように、よい環境の中で学習すると、学ぶことへの意欲が高まってきて自分への刺激を与え続けていくことができる。刺激を与え続けた結果、意識改革がはじまり前向きな取り組みが長く続くようになる。残念ながら全ての生徒がこの合宿で意識改革に成功したわけではない。しかし、続けていくと何かが変わるような気がする」と合宿後の感想文に書いている生徒が多かった。

同じような意識改革の機会は、実は毎回の授業にある。まずは、今ある学習環境を十分理解し、利用してほしい。意識改革が実感できないときは、ひたすら問題に取り組み、講師のところへ行って行ってみよう。そして、講師とのやりとりを通じて、学習意欲を高めていこう！

(小林(英))

## 『君が過ごしている時間とその場所』

毎月一日は映画の日である。いつもは大人ひとり一八〇〇円の映画チケットも一〇〇〇円と割安だ。DVDが発売されてからレンタルすれば安上がりだと考える人もいるだろうが、あの映画館の中の臨場感はたまらない。【その場に

る皆が一体」となった感覚がたまらない。祖父から聞いた話だが、昔は映画が始まると、スクリーンに向かって拍手を送ったそうだ。オペラハウスにいるような盛大なる拍手が沸き上がるこの雰囲気味わつと病みつきになるとのことである。

私が映画を好きになったきっかけは、小学三年の夏。我々は近所の市民プールに行くためにお金持ちの友人の家で待ち合わせをしていた。すると、その友人の父親が時間を持て余す我々のためにミニシアターで映画を放映してくれた。タイトルは知る人も多い、『S.W.』。我々はプールに行くことを完全に忘れて、スクリーンを見入った。初めて観るその映像に釘付けになった。今もあのとき、その場にいた友人の顔を覚えていて。今もそのとき座っていたソファ、飲んでいたオレンジジュース、【その場の光景】が鮮明に記憶に残っている。

大学受験のときだった。孤独な勉強を続けて、気分が鬱屈したとき、何気なく入った映画館で私は勇気と生涯の友人をもらうことになった。主人公は人間になりたいと願う天使で、神様の許しを得て、人間になる。人間になった天使はあらゆるものに感動する。一杯のインスタント・コーヒー、路上に咲く赤い花、汗をかきながらの労働、暮れゆく夕日、一人の女の子。だが、運命は皮肉にも、主人公は自分のしている

仕事にマフィアに関わる人を傷つける仕事と知る。やりきれない主人公はボスに正義を諭すのだが、逆に殺されてしまい、天使として、天に帰るといふストーリー。現実にはありえない話だが、主人公がインスタント・コーヒーを飲んでおいしそうに飲む姿を観て、私は思わず笑

顔と同時に涙がこぼれた。私の両隣りに同じように泣くふたりがいた。「ああ、この人も同じ気持ちなのか。」なんとなく嬉しい気持ちが自分の中にあり、いずれこのふたりとは生涯の親友となった。

私が今まで生きてきた生活の中に映画が必ず顔を出す。良くも悪くも(ちなみに悪い思い出もある。)映画がなぜ素晴らしいかといつと、【ひとつの場で皆が同じことを共有すること】にあると私は思う。同じものを皆で観て、泣いたり、笑ったり、悲しんだりすることは何か一体感のようなものを感じる。こんなとき『映画って、素晴らしい』と心から思う。



今の君たちに照準を合わせてみよう。学校や塾の君のクラスを思い起こしてほしい。君が授業を受けているとき、同じクラスの仲間も当然だが、同じ授業を受けている。いわば【同じ時間と場を共有している。】これから君たちが将来大学や社会に出ると、ひとりで行動したり、考えたりすることが極端に増えてくる。【皆で一緒に、という時間や場】が持てなくなる。ひとりでしたことはあまり記憶に残らず、感動も薄い。しかし、もし皆で【同じ時間や場にいること】を意識すれば、感動が生まれ、君の過す時間はとても価値を見出すものになるだろう。今、君たちが何気なく過ごしている環境や時間はとても貴重だということを実感してほしい。(松尾)

### ▲継続希望の方へ▲

- ▶ 卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料で送り致します。
- ▶ 在籍していた教室までご連絡下さい。